The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アジア太平洋論叢 第12号　序
Author(s)	赤木, 攻
Citation	アジア太平洋論叢. 2002, 12, p. 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99975
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

序

大混迷の時代の到来である。世界規模の地殻変動が始まった。ここ半世紀ばかり私たちの生活を支えてきたすべての基盤に変動の軋みが見え始めた。多発する企業の倒産、リストラによる失業、自殺者の急増、自治体の赤字財政、企業倫理の衰退、官による不正の横行、族議員の利権への執着、金融不安、情報の管理と氾濫、民族紛争の勃発、国際テロの頻発、地球の温暖化などなど、数え出せば切りがない。大学人も変動に直面し、日々苦悩している。その変動は、昨年文科省が打ち出した半ば強制的といえるかもしれない国立大学の構造改革の一環としての「法人化」である。

こうした変動に共通するのは、先が見えないということであろう。だから、社会には不安が蔓延してくる。変動の影響を直接受けた場合はもちろんのこと、毎日の生活そのものにとりたてて支障をきたしているわけではない場合でも、えも言われぬ不安がつきまとい、前向きの気力を持てないのである。世間の顔色がさえないのである。

私たちは、不安の空気を世間に漂わせている冒頭に列挙したような様々な現象をただ単に追いかけるだけではだめである。地殻変動の表面のみではなく、より深層の構造的変動にも視座を向けなければならないだろう。それは、「現実」と「真相」という関係として捉えられるかもしれない。「可視的なモノ」と「不可視的なモノ」ともいえるかもしれない。実際、タイの村での次のごとき経験は、その意味で示唆的であろう。農作業中に鎌の使い方を誤って怪我をしたのだが、その理由は畑の神を大切にしていなかったためのたたりであるとし、怪我を治すには畑の神を丁寧に祭らねばならないというのである。つまり、「鎌の使い方を誤った」のは「現実」であり、「神を大切にしていなかった」のが「真相」であるとする村人の解釈である。

さて、今年も『アジア太平洋論叢』(第12号)を、少し遅れ馳せながらも、お届けする。収められた論文、書評は、いずれも力作であり、大きくとらえれば地殻変動に関係しているといえよう。大方のご批判を賜れば幸いである。

2002(平成14)年9月

赤木　攻

(アジア太平洋研究会・会長)